



2012.11.1

11月 ちとせだより

神戸YMCAちとせ幼稚園

「子どもらしい」という言い方があります。これは、「子どもっぽい」とか「子どもじみた」といった大人に対して使う悪い意味での言い回しではなく、子どもが子どもとして生き生きと過ごしている望ましい姿を表した言葉です。しかし現代は、子ども同士が自由に関わる時間が許された時間も空間も仲間も制限され、大人が管理し指導するお稽古事の類にその時間の多くを奪われていることも事実です。また、遊びもスケジュール化された一日の中で、予定と予定の間の限られた時間が、遊びの時間として与えられているのであれば、それは本来の子どもにとっての遊びの時間ではなく、単なる暇つぶし・時間つぶしの時間でしかありません。そんな時間の使い方では、おのずとゲーム機などを相手に一人で過ごす時間となるでしょう。

常に大人の顔色ばかり気にしている子どもは、子どもらしい表情をなかなか見せてはくれません。親や大人からの評価ばかりを気にして、本当の自分の気持ちを素直に表現することが出来ないのです。子どもの頃のいわゆる「良い子」が、必ずしも大人になった時に成熟した大人になるとは限らないわけで、「～しなければならない」「～でなければならない」といった規範の中で育った人間は、頭で理解しているかも知れませんが、生き方の原動力となる価値観や信念を自分自身の中に持ちえているかは疑問です。子どもは、まず親から無条件に愛されているという実感を持たなければ自分に自信を持てませんし、また、人を悲しませた経験、いけないことをしてしまった経験、そんな経験も幼児期の子どもであるからこそ許され、そしてそのような経験から学ぶことも多いのです。

また、子ども一人ひとりの成長にも個性があって、皆が同じように成長していくわけではないのですが、他の子どもと比較して評価したり、「みんながしているから」「みんなが習っているから」といって、我が子が全然興味がないことをさせたりしようとする親もいます。そんな風に扱われている子どもも、子どもらしい表情は見せてくれません。子どもは自分を取り巻く環境から、一人ひとり興味や関心に合った様々なことを学んでいきますが、将来に役立つからと様々な課題を与えられる生活からは、子どもたちの自由な発想や想像力が発揮されることは難しいのです。今年度のノーベル医学生理学賞を同時受賞した、山中伸弥京都大学教授と英国ケンブリッジ大学のジョン・ガードン名誉教授の生い立ちも様々紹介されていますが、まさしくこのお二人は本当に子どもらしい子ども時代を過ごし、また評価されない時代も過ごし、そして多くの失敗もしながらも、自分が本当に興味と関心がある世界の中で、その自由な発想と想像力を発揮して自らが納得できる人生を歩んで来られたのだらうと思います。

子どもが子どもとして、子どもらしく過ごすことが認められた環境が、子どもの本当の成長にとって大切であることを忘れないでいたいと思います。

年主題 「あふれる愛 小さきものとともに」

11月主題 「ありがとう」

聖句 “無くした銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください。”

(ルカによる福音書 15章 : 9節)